山陽新聞社 代表取締役社長対談

山陽新聞社 代表取締役社長　松田 正己×第64代理事長　鈴森 賢史

鈴森理事長：本日はどうぞよろしくお願いいたします。まず、今年6月に新社長に就任されて3カ月ということで、まだまだお忙しいかと思いますが、今のお気持ちを教えて下さい。

松田社長：山陽新聞は明治12年の創刊以来、「地域とともに」の精神を一貫して保ち続け、常に地域の発展を念頭に置きながら言論報道活動を続けてきました。歴史と伝統のある新聞社の創刊135周年の節目の年に社長職を引き継ぐことになり、ひしひしと重責を感じています。山陽新聞がなくなれば地域は廃れてしまう、言ってみれば山陽新聞がきちんと機能することが地域の発展につながる。そんな気概を持って社業に取り組んでいます。編集局長だった時は地域の出来事を公正に丁寧に取材し、役立つ情報を提供することを第一に、より良い紙面づくりばかりを考えてきましたが、今は社業全体についても日々、考えをめぐらせています。地域から山陽新聞がどのように見られているかを強く意識するようになりましたね。

鈴森理事長：私も松田社長がおっしゃる通り山陽新聞社の発展は地域の発展につながると思います。「地域とともに」というテーマがこれからも続くと考えてよろしいのでしょうか。

松田社長：社長に就任して社員に所信を述べた際、「地域の味方になろう」と呼び掛けました。創刊135周年を迎えた今年の年頭あいさつで、越宗社長（現会長）は「もっと地域の中へ」と述べられました。これまで以上に地域の中へ入り込み、多くの方々の声を聞かせていただく。一層地域に寄り添っていく。あらためてそのことを再認識する年にしようということでした。全国紙はどうしても国、中央の視点で記事を書き、その意味で政府をチェックする役割を果たしているといえます。もちろん私たち地方紙も中央官庁に対するチェック機能を備えていますが、視点は地域にあります。山陽新聞社は発行エリアの備前、備中、美作、備後といった地域に足場を置き、地域の情報、地域に影響がある政策、課題などを中心に取り上げています。「地域とともに」という基本姿勢は、これからも寸分とも変わることはありません。

鈴森理事長：松田社長も記者として活動されたということですが、どの分野でご活躍されたのでしょうか。

松田社長：駆け出し時代は社会部に在籍していました。昔の岡山東警察署、今の岡山中央警察署の記者クラブに詰めて事件や事故を追っていました。その後、玉野支社、高梁支局などに異動、一番長かった政治部にはおよそ10年、岡山県や岡山市の行政を中心に、国政も含めた取材に忙殺されていました。

鈴森理事長：長い記者生活をされたことが伝わってきますが、その中で思い出に残る取材はあるでしょうか。

松田社長：毎日毎日それこそ休日返上で情報収集に努めていましたが、それはそれで結構楽しかったものです。地域の政治の行方、地域の将来を左右することになる県政や市政の首長、議員選挙は特に注意深く取材を行い、報道していきました。住民サイドで批判するべきは批判し、時代を的確に捉え、公正公平な地域の羅針盤となる記事を書いてきたつもりです。

鈴森理事長：今の時代を正確に捉えることが必要な、とてもダイナミックなご職業だと感じます。

松田社長：私の記者時代は瀬戸大橋や山陽自動車道、岡山道の開通など、岡山がダイナミックに動いた時代でした。人の歴史を記録するのが日記であるならば、社会の歴史を記録するのが新聞だと思います。「歴史に刻む」ということでは、どのような小さな記事でも誤りは許されません。翌日訂正の記事を載せたとしても、活字として残ってしまいます。だからこそ細部の細部まで気を配るというか、気をつけてきました。今の記者も、もっともっと気配りをしてほしいと思います。“神は細部に宿る”という言葉があります。新聞にも当てはまります。蟻の目を持ち、細部にこだわることで真実にたどり着けるのです。ただ、全体を見失わないよう鳥の目を持つ必要もあります。そのようにして、一つ一つの事実を積み重ねた正確な記事だからこそ地域の信頼にこたえられるのです。

鈴森理事長：近年は携帯電話やスマートフォンでニュースをどこでも気軽に見ることができますが、そのことについてご意見をお聞かせ下さい。

松田社長：以前は電車の中で新聞を読む方を多く見かけましたが、今では携帯電話やスマートフォンに熱中している人ばかりが目立ちます。もちろん私もスマートフォンを利用します。ただ、そこで得られるニュースの大半は新聞社やテレビ局から提供されたものです。新聞社では記事が客観的かつ正確であることを期すため、何段階もの手続きを踏んでいます。記者はさまざまな事象をしっかり検証して記事化し、現場の仕切り役である「キャップ」や記事を編集する「デスク」らがさらにチェックします。何人もの手、目を通って新聞に掲載しています。万人の目や歴史の批判に耐え得る記事、情報を新聞社は送り出していると自負していますが、インターネットは今後ますます普及していくでしょう。大きな環境変化の中で、私たちも新しい新聞の在り方を模索する必要性を感じており、その一環として今年6月から電子版の配信を始めました。

鈴森理事長：岡山青年会議所は本年、子供の教育に関連する事業に力を入れて取り組んでいます。キッズビジネスパークin岡山では山陽新聞社にもご協力をいただきありがとうございました。NIE（教育に新聞を）活動も含めて教育に果たす役割について教えて下さい。

松田社長：文部科学省の学習指導要領にも盛り込まれたことから、学校でのNIE活動は盛んになってきました。学校側から要請があれば新聞の活用方法について出張講義を行っており、昨年さまざまな場所に記者が出向いた回数は200回以上に上ります。新聞記事は見出しのほか、リードと呼ばれる前文を読めば大まかな内容が分かり、読み進めていけば詳細を知ることができます。また、記事を読むことで、活字に親しむことになり、理解力、判断力、表現力を高めることができます。さらに社会の出来事に興味を持ってもらえるようになります。紙面では、岡山県の教育の現状を報じ、県民、市民の協力を得ながら、教育の在り方を見直してもらえるよう「教育再考」という記事を継続して掲載しています。

鈴森理事長：イオンモール岡山が開店すると岡山の街も変わってくると思いますが、松田社長は岡山の街がどのように変わっていってほしいとお考えですか。

松田社長：魅力ある街とは“人が住みたい”と思う街だと考えています。山陽新聞社としても地域のオピニオンリーダーとしての責任がありますので、街づくりについてのシンポジウムを開き、その詳報を掲載するなど、問題提示や提言を行っています。イオンモール岡山の開店も岡山の街をより住みよい、魅力的な街に変えるきっかけになればと考えています。今でもJR岡山駅周辺は度々、渋滞しています。例えば車の流入を抑制する方法や代替交通機関の整備などを検討する絶好の機会になると思います。富山市の先進事例がありますが、岡山には岡山の地域性、特性があります。これを生かした街づくりを官民で実現したい。岡山に住む皆で協力して魅力ある街になるよう呼び掛けていきたいと思います。

鈴森理事長：岡山青年会議所のメンバーも仕事を持ちながら街のために活動していますが、岡山青年会議所に今後期待することなどありましたら教えて下さい。

松田社長：岡山青年会議所が始められた「うらじゃ」は岡山を代表する祭りになりました。これは岡山青年会議所の皆様方の若いエネルギーでないと成し得なかったことだと思います。地元経済界の次世代を担う皆様の若い感性を生かし、魅力あふれる活動をもっともっと展開していただきたい。私たちも「木下大サーカス」や女子プロゴルフのステップ・アップ・ツアー「山陽新聞レディースカップ」などを開催して地域の活性化に取り組んでいます。地域に根付いた文化や祭りがあれば、人々を感動させ、地域のアイデンティティーを醸成、それを守るために地域に残ることにつながります。このような文化や伝統を発信し、地域の魅力を知ってもらうことこそ重要です。岡山青年会議所の皆様にはそれを成し遂げる力があるはずです。今後の精力的な活動に期待しています。

鈴森理事長：お話しにある通り、私も岡山青年会議所はもっと発信していく必要があると感じていますので、青年として、子供を育てる世代としてどんどん発信していきたいと思います。本日はありがとうございました。

COLLABORATION
DANRYU 2014 VOL.4